

# 「震えるアンテナ」は人と人をつなぎ、学校を変える

公立高校 渡部翔子

## 1 「震えるアンテナ」

茨木のり子の詩に「汲む」という作品がある。

私は、ここから「大人になってもどぎまぎしたっていいんだ。頼りないむき身の生牡蠣のような傷つきやすさの中にこそ、いい仕事を生む『震える弱いアンテナ』が隠されているのだ」というメッセージを受け取り励まされてきた。

子ども時代の私は、母のアンビバレントな感情表現に翻弄され、愛情を自分に向けるために役に立ってほめられたいと取る行動がことごとく裏目に出るような失敗ばかりで、常に母の顔色をうかがいながら育った。高校生になってもコミュニケーションに自信がなく、上手く自分を開けず、教室でお弁当が食べられないような生徒だった。

もしかしたら自分が結婚や出産を経験する中で母と理解し合えたのかもしれないが、私が21歳の時、母は亡くなり、その機会は永遠に失われた。

国語の教師になってからも、大勢の前で話すことは苦手なまま今日まで来た。だから、「汲む」はくじけそうになるたびに自分を支えてくれる応援歌だった。

教師になって30年弱。詩の中にある「震える弱いアンテナ」で人とつながってきたような気がする。「震えるアンテナ」とは、「人の痛みを感知し、共振する柔らかく、傷つきやすい触角・感受性」で

ある。

最初に着任した高校では、「人には言葉や態度で表現できない想いがあるはずだから、その想いを汲みたい」と生徒や保護者や同僚と接してきた。それができた時に、混線した糸がほどけて、ものごとがうまく進んだように思う。その行為は、相手のためというより、幼い頃、母に自分の想いを届けられなかった私が、母に代わって他者の想いを聴き取ることで、幼い頃の自分を慰撫する代償行為だったように思う。だから、私は自分の中の欠落を埋めようと耳を傾け続けたし、その行為を重ねる中で、必要に迫られ外部や専門家とつながり、様々なことを学んでくることができたのかもしれない。

## 2 「誰も排除しない弱音の吐ける学年」を目指して

2年前、初めて学年主任となり、新学年団の発表後、若い教師も生徒も失敗を恐れ、転ばぬ先の杖的なシステムが目についたので、「失敗を恐れず挑戦するが、誰も排除しない弱音の吐ける学年」を目指し、次のようなことを心がけたいと話した。「本当の学びや成長は失敗の中にこそあり『最初が肝心だからナメられないようにシメる』や『思うとおりに言うことをきかす』ことは、教育とは別物だからしたくない。保護者と協力しあって、生徒との信頼関係を築くことが大事。そのためには、想いを汲み取るような対話が大切。嵐の思春期では、交通整理と言語化を援助するのが親や教師の役割ではないか」と。

これに対して、「ダメなものはダメでしょ」とい

うY先生に、「確かに生徒は、『ダメなものはダメ』という大人の壁を越えて成長していく側面もあるが、ぶつかったときに冷たいコンクリートではなく、血の通った温かい、揺らぎを内包しているような壁でありたい」と叱咤に応えた。

入学説明会で「保護者の声シート」に生徒の長所、心配、伝えておきたいこと等の記入を提案・実施した。ほぼ全員が書いてくれ、担任がすぐに目を通し、必要に応じて情報を共有した。生徒を多面的に捉え、何か問題が起きて保護者への連絡が必要になったときにも、必ず日頃のいい面から入れるようにする一助として活用している。

入学式の後、保護者に「初担任、初学年主任のフレッシュなメンバーをベテランが支えるバランスのいい学年です。我々も、生徒たちもたくさん失敗すると思います。未完成な人々が集まって失敗し、そこから学び合ってゆっくり成長していくのが学校だと思います。自分のお子さんを見守ると同様、よそのお子さんの成長も見守ってください」と話した。本音を言えば、担任7人中4人が初担任、学年主任を2周り経験し、開校から歴史を作ってきた発言力の大きなY先生が存在が不安で仕方なかった。しかし、「ないものねだり」より、「あるもので美味しいものづくり」の姿勢で、何事も、とにかくいいところを声に出して言うことが、自他どちらに対しても大事だと思っている。

### 3 揺らぐ生徒を支える一屈く言葉と行為を探して

入学2日目の夕方、T子の母親から、激昂した

電話が入った。発達に課題をもつK子とのトラブルだった。母親の声が落ち着くまで聴いた後、本人からも話が聴けた。T子によると、入学説明会后すぐにグループができたが、身体的特徴をあだ名にして呼び合うような関係となり、その中心にいるK子に「気にしているのに」と言っても真剣に受け取ってもらえず「ごめん」で済まされると言う。「でも冗談のつもりなのかも」と揺れるT子。

電話の後、管理職と数名の教員で話し合った。例年5月に実施する「生活アンケート」を前倒して翌日実施し、その中にK子の言動に関する訴えがあったとK子を放課後呼び、私から釘を刺すことにした。

私はK子のお話をじっくり聴き、中学校の部活動での人間関係でつらい思いを経験したことを知った。今後、自分の言動を意識すること、K子を訴えた者探しや、SNSに書かないことを約束させ、少し様子を見ることにした。

K子の母親には、いきさつとK子のサポートをしたいと考えていることを担任から伝えてもらった。また、T子の家にも私がK子から受けた印象を伝えた。

しかし、T子の母からの連絡で、K子はその日、LINEに「楽しかった高校生活が崩れそう。明日から声出さないようにマスクして行こう」と書き込んだことを知った。30分後、両親とT子が来校し、「いじめだ」との訴えがあった。今度は名前を出して指導する同意が得られたので、隣室の校長と相談した。

本人が傷ついたと言う以上「いじめ認定」し、県

に報告はする。しかし、いきなり指導委員会で「謹慎〇日」とはせず、T子が受け入れられるようになるまで別室で教員やカウンセラーが関わるという方向性が見えた。校長室から戻ると、両親はやや落ち着きを取り戻して、「大ごとにしてよいか」とためらい、T子は相変わらず「冗談かも」と繰り返していた。「冗談だったとしても傷ついたんだよね」と私が尋ねると、額き涙をこぼした。私はT子に「K子も周りも、今が学ぶ時ではないか。これからの指導は、K子を排除しようとするものではなく、どんな関係を作ればいいのか、K子や周囲が考えるチャンス。K子が教室に戻った時には、周りの支えが必要になる。T子も無理に友達でいる必要はないし、関わり方も変わるかもしれないが、できる形で支えてほしい」と伝えた。T子は深く頷いた。

この後、残っていた学年の教員で翌日の動き方を話し合い、管理職にも確認の上、朝、全クラスに学年内でトラブルが起きたことを告げることにした。憶測が拡散する前に事の概要を説明し、いじめの定義が世間的なイメージよりも広義であり、そのつもりがなくても、誰かが傷ついたら「いじめ」と呼ばれてしまうことを、生徒全員に知らせたいと考えたからである。

担任団から「クラスで話すのに、せめて簡略なシナリオ原稿がほしい」と要望が出て、疲弊している私と担任Z先生を支えようと、数名の教員が遅くまで、1台のパソコン画面を覗き込み、生徒に伝わる言い回しを考え合った。

翌朝、K子には副担から、O子・T子を除く5人

には私から話をした。私は5人に、「K子を別室に呼んで話をしている。傷つけられた子は最後まで冗談だと言い張ったが、たとえそうでも、大人の目からは人権侵害にもあたる、見過ごせない内容だった。両親からの訴えが、学校だったからこそして指導できるが、警察だったら手を離れてしまう。このまま事態が改善されなければ、そうなる恐れもある。また、傷ついた子が誰なのかを探そうとすると、助けを求める人に追い打ちを掛けることになる。この中の誰もが傷つく立場になる可能性がある。そのときに守ってあげられないような学校はおかしいと思わない？私は、誰が助けを求めてきても、きちんと受け止め、守れる学年を創りたい。私も含め、誰もが、間違っただけから一緒に学び合うためにここにいる。傷ついた人も、傷つけてしまった人も、同じクラスで一緒に生活していくことになるのだから、みんなの協力がぜひ必要」と伝えた。

その頃、各担任は私と同じ内容と、今後どんなクラスにしていきたいか、担任としての想いを前向きに語った。

放課後、改めてグループ1人ひとりから話を聞き取った。他の生徒が空気を読んであまり口にしなれないようなことを発言したり、入学してすぐに抱きついたりするK子に対する距離感や見方は異なるものの、K子を「明るくて、面白い、楽しい学校生活には欠かせない」友達だと認識していることがわかった。「K子のよさを認めつつ、暴走しそうな時はK子を守るためのストッパーになってほしい。今朝、担任が語ったような、クラスにする手助

けをしてほしい」と言うのと皆大きく頷き、泣いていた。また、トラブルを訴えたのはO子だと全員が思っており、T子であったと知って一様に驚いていた。一方、「今回注意で終わったらK子は変わらず繰り返してしまうので、自分を見つめる時間をつくってもらった方がいい。T子さんを守ってほしい」というK子の両親の言葉を担任が電話でT子の母に伝え、K子の反省文も読み上げた。T子の母は「親御さんの気持ちを思うと切ない」と言った。K子の両親の申し出を受け、指導委員会が開かれた。学年の意向が反映され、規定より短い謹慎で、内3日間は登校謹慎となった。その間に、K子とT子ともに臨床心理士との面談を実施し、グループにも2人のサポートを再度頼んだ。そして、K子が書いた手紙を元に、まずは本人同士の、次いで両家族の対面にこぎつけた。

K子が自分の言葉で謝罪と反省の気持ちを述べる。緊張して血の気が引き、声も手も震え痛々しい。次いでK子の父親が謝罪。それを受け、T子の母親が「どれだけつらくて、親として許せないって言ってやろうと思って来たけど、今一生懸命謝ってくれて、声も震えてて、なんだ、うちの子と同じじゃないって思えた」と言った。

T子は、なかなか話し始められず、視線を母親の方に向けて助けを求め「なんて言えばいいか、わかんないんだもん」と幼児のような口調になった。私が促すとT子は、「部活も委員会も同じだし、また普通に話したり笑ったりしたい」と言った。

ぎこちない2人にT子の母親が「今話さないでどうやって来週から教室で会えるの。K子さん、

教室に戻るの怖いよねえ」と声をかける。すると、T子が「みんな、ずっとK子が戻るのを待ってるから大丈夫だよ」と泣き笑いで応え、T子の母親が照れる2人を抱くようにすると、2人は自然と手をつなぎ合い、和解となった。

入学直後の一つのクラスで起きた事件だったが、誰もが「被害者」にも「加害者」にもなり得ること、そのとき誰も排除しないことを、学年の生徒全員が知り、考える機会になった。それは、「被害者」を守るためには「加害者」を排除するしかないという同僚とも、互いの疑問をぶつけ合い、どうしたら生徒たちに届く言葉や行為が選べるのかを探ってきたからだ。生徒や保護者の声をじっくり聴き取ること、刻々と変わる事態に対して、性急に結論づけず、ともに考え合い、思春期の葛藤に寄り添うことで、保護者や生徒たちの関係が変わっていったのではないか。

#### 4 Mを受け止め、多様性を認め合う学年にMとの出会い

「入学前相談」に母親と2人で来校したMの不安要素はトイレと制服と髪型だった。トイレは、利用者が少ない他階を使い、制服は、女性の豊かなバリエーションの1つとして捉えることで、何とか折り合えた。問題は髪型で、妥協点を探ってもうつむいたままだ。Mが自分の性自認について語ってくれた後、私は「いろいろ勉強したんだね。お母さんに打ち明けるのも勇気が要ったよね。私たちにも話してくれてありがとう。みんながグラデーションの中で生きていること、誰もが居心地

よくいられる学校や社会ってどう創って行けばよいのかを私たちもやっと勉強し始めた段階だから、一足飛びに変えるのは難しい。でも、あなたの勇気を無駄にしたくない。同じような思いを抱えながら、声を上げられない人がほかにもたくさんいるはず。先生方とも話し合わせてほしい」と情報を共有する許可を得た。また、「髪型のルールもすぐには変えられない。特別扱いができたとしても『なぜ?』という矛先があなたに向くことが心配」と話したが、頷くことはなかった。LGBTのサークルや某医大の情報を伝えたところ、母親が、電話相談し、専門医師につながり、現在も月に1度のペースでカウンセリングを受けている。最後に、「担任は女性にしてほしい、話ができてよかった」と言って帰っていった。

その後すぐ、私と副主任とで校長に相談し、幸いMの担任と決まっていた女性教員のZ先生に話をした。教員研修と校則を見直す話し合いが必要かもしれないと伝えた。その日の内にLGBT関連のDVDを事務長が数枚借りてきて、学年中心に職員室で視聴した。

入学式当日、規定内に髪を切ってきたMの姿に、結局私は、力で言うこと聞かせてしまったのかと胸が痛んだ。

5月に外部講師を招き、LGBTについての教員向け研修会を実施した。しかし、終了後の雑談から、学ぶ機会を増やさないと、教員自身が自分ごととして捉えるのは難しいと感じた。

**「フツウ」や「当たり前」を疑う姿勢を培う**

夏休み前に、『『セクシュアルマイノリティ』の存在を知る』という切り口のものではなく、生徒たちが登場人物に感情移入して、自分ごととして考えられるような映画を見せたいと思った。性教協（「人間と性」研究協議会）の仲間でもある元養護教諭が、荻上直子監督の『彼らが本気で編むときは』を薦めてくれたので、学年の教員向けに試写会を実施し、Mと母親にも家庭で観てもらった。

試写会后、若手教員の思わぬ抵抗に直面した。「生徒の反応が心配」「文科省や厚労省の作った教育DVDのほうが無難だから、そちらを先に見せるべき」「ネグレクトのシーンもあって心配」「生徒から次々カミングアウトされたらどう答えてよいか解らない」等の声があがった。「映画を見せなくても、カミングアウトはあるかもしれない。されたらそれは、その先生が信頼されたということだから、逃げずに正直に受け止めてほしい。『よく話してくれたね。自分もよく解らないけど、一緒に勉強していこう』って。どんな教材が生徒に適しているのか、考え合いましょう」と応えたが、映画企画は取り下げた。

数日後Mと話をしたとき、「映画を観てよかった。他の人にも観て欲しい。少しでも世の中にこういう人がいて苦しんでいることを知ってほしい」とMが言った。母親も「クリニックの先生が『よい学校と出会ったね。こんなに早く環境を整えようと具体的なアクションがあるのはすごい』と言ってくれ、本人も『学年の先生たちが映画を見せようと考えてくれることが嬉しい』とクリニックの先

生に話していた。私も観て子どもとの接し方など勉強になった」と言った。映画上映は、周りの生徒の反応が、却って本人の心を傷つけるのではと心配する声もあり、見送ることになったと伝えた。

何とか、Mにエールを送りたいと学年通信で次のような発信をした。「集会で『皆さんには、この夏休みを、世の中を知る機会にしてほしい』と言いましたが、知らないから傷つけてしまったり、正しい知識を持たないから恐れたり、その恐れが偏見や差別を生むことがあります。自分の『フツウ』や『当たり前』が他の人にとっても同じとは限りません。私たちは、濃淡の差はあってもグラデーションの中で生きています。先月、お茶の水女子大学が体は男性で心が女性という学生を受け入れることが発表されました。私は、誰もが生きやすい社会を私と一緒につくってほしいと思います」

### 「性の多様性」をテーマにした講演会

校内の人権教育委員会と教育相談委員会に働きかけ、全校生徒対象の講演会のテーマが「性の多様性」に決まった。講師は偶然にも地域の学習会でMのことを相談していたHさんであった。多数派を「フツウ」と表現した瞬間、「フツウでない人」への差別やいじめが生じること。「らしさ」の押しつけが人権侵害につながることを、様々なワークショップを通して実感的に学ぶことができた。講演後、教員からも「すごく勉強になった」という声が聞かれた。何より、Mの表情が今までにないほど明るかったと知って嬉しかった。

生徒の感想から主なものをまとめ、学年の教員に配った。

「『らしさ』の押しつけは人権侵害になることもあると知った。男でも髪を伸ばしたい人もいる、学校の頭髪規定はおかしいのではないか」という意見に対し批判的な教員もいたが、私は、学年集会で、こういう視点を持つことや意見を表明できることがいかに大事かを話した。

### 誰もが楽しめる学年レクづくり-Nから教えられたこと

1年次につくった「行事係」という学年独自の生徒組織があり、遠足の服装規定などを決めてきた。年度末の学年レクを企画する中で、いつもほとんど声を発しないNが、運動系の提案が続く中、小さいながらもはっきりと「百人一首」と言った。3種目に絞られた時、私は同じ種目で競い合うのが学年レクだという固定観念から、更に1種目に絞ろうとした。

だが、生徒の中から「絞る必要ある?」「運動が苦手な人もいるよ」と声が上がった。予想外の展開で、「ドッジボール」「バドミントン」「百人一首」を同時に行う形に決まった。

当日、運動が苦手な休みがちな生徒も、くつろいだ表情で参加していた。少数派にも目が向けられたこと、そのきっかけを声の小さなNが作り出したことが嬉しかった。その中、何とMが最初の五音で下の句が判るという隠れた才能を発揮し、クラスを優勝に導き賞賛を浴びた。少しくラスに居場所ができたようだと言ったZ先生から嬉しい報告もあった。

学年レクを学年の「行事係」が主催することで、Nが発案し、Mの活躍シーンが生まれた。写真にはNとMと場面緘黙のIが日頃は見たことのない笑顔でカルタを囲む姿が映っている。改めて、「少数派の思い」に寄り添うことで、生徒の「居場所」が創られることに気づかされた。

### Mの焦りと苦しみに共振する担任Z先生

2年次もMはZ先生が担任した。私には、出会った当初は全く隙のないつるんとして見えたZ先生が、実は高い共感力と豊かな感受性の持ち主であることが見えてきていた。

1学期、Mの落ち込みはひどく、Z先生との面談でも、「どうせ・意味ない」と毒のある言葉を果てしなく吐くようになった。医師処方精神薬を服用するようになるが、授業中も本人の意志にかかわらず居眠りが増え、課題の提出も難しくなった。結果的に、成績が大幅に下がってしまった。6月から7月によく合う薬に出会い、顔色もよく、元気そうになってきたとのZ先生からの情報に少し安堵する。勉強も巻き返しを図るが、数科目で欠点がついた。

9月の文化祭でMのHRはお化け屋敷で賞を取った。Mもお化け役を頑張り、誘ってもずっと後ろ向きだった修学旅行にも、これを機に行けたらいいねとZ先生と話した。

Z先生は、Mの修学旅行参加を諦めず、粘り強く働きかけた。本人も本音の部分では行きたがっているようだった。そして、RやHの「Mが行かなかったら寂しい」等の声掛けでMの気持ちが徐々に

に参加の方向に変わっていった。

体育祭予行の喧噪の中、Z先生が声を掛けてきた。今年度、Z先生のクラスになった山岳部で唯一の女子のRについて、4月の二者面談の頃から、もしかすると性自認に悩んでいる生徒かなと感じて、Mと接点を持てるとよいなと思いながらよく見ていたこと、最近RがZ先生にカムアウトしてくれたこと、Rは、美しい海を見るために修学旅行に参加することを知り、その考え方をMに話してほしいとRに頼んでおいたことなどを話してくれた。修学旅行参加申込みのデッドラインが迫るある日「Rと本音の話ができたの？」とZ先生がMに尋ねたところ、「話をするうちに自然とお互いのカムアウトができていた」と答えたことなどを語った。

「すごいよ！Zさん、素晴らしいアンテナだね。M、本当によかったね」と2人で喜び合った。Z先生は、「それで、昨日の放課後3人で盛り上がりちゃって、修学旅行、こうだったらいいなっていうことを言い合ったんです。そうしたらRとMが同じ部屋になれたらいいという話が出てきて、渡部先生に相談することになったんです」と言った。

放課後、4人で話した。「2人とも、本音で話せる相手が見つかってよかったね」と声を掛けた。

「MとRを2人きりで同じ部屋に寝かすことは難しい。Z先生や私の部屋に2人が来て寝ることは、もしかするとできるかも知れないが約束はできない」その場合でもRは他の生徒と同室で問題がないことを確認した。Mは、服薬するようになって初めての遠出で、自分がどうなるか大きな不安を

抱えていた。独りぼっちで寝るのはつらいと言う。

「金銭的にも精神的にもなるべく負担の掛からない道を探るから」と約束した。

学年会議で相談すると、主に男性教員たちから、Mが私やZ先生と同じ部屋で寝ることを強く反対された。「Mの部屋で話し相手になり、消灯時間を過ぎたら戻るしかないか」とZ先生と話すが、これからMにその話をしなければならぬZ先生の胸中を思うと苦しかった。

翌日の放課後Mに話をし終えたZ先生が私の所に来た。「Mに『一人部屋で寝るしかなくなった』と伝えたところ、ここ数日際だって明るかった表情が一気に暗くなり落ち込んでしまった。私がぬか喜びさせて、今になってMを傷つけてしまったと自分の無力さが情けなくて悲しくなった。でも『粘るから諦めないで』とかろうじて伝えて渡部先生に助けを求めにきた」というZ先生の言葉に私は覚悟を決め、「もういいよ。3人だけの秘密で、気持ちが不安定になって、介抱しているうちに夜が明けちゃったということで行こうよ」とZ先生に言った。

Z先生が、「Mをいたずらに傷つけちゃって」と落ち込んでいるので、私は「だけど、Zさんが担任でいてくれたからこそMは修学旅行に行けるんだし、ちゃんとMには伝わっているよ。私こそ入学前から、Mのカミングアウトを無駄にしないといっておきながら何一つ変えられていない」と、2人でおいおい泣いてしまった。その後、Z先生は、「落ち込んでしまっているMに、この秘密の対応策をどうしても今夜のうちに直接伝えたい」と出

かけていった。

1時間ほどしてZ先生が戻り「3人の秘密というのは少し不安らしいが、とりあえず前向きにはなってくれた。あの後、Mは、行事係でRと、入村式の司会をするHさんと行動班が一緒のY子にもカミングアウトしたんですって。そうしたらHはお姉さんの友達にLGBTのお友達がいたらしくて、あたりまえに受け止めてくれたって。で、『民泊とか大丈夫？何かあったら自分が上手くやるから』と言ってくれたそうなんです。すごいですよね。Mは、傷ついているのに、勇気出して頑張ってた。私、逆に励まされました」と話すのを聞き、「2人でMを守ろう」と決意を新たにした。

修学旅行では3泊4日中、多くのドラマがあった。Mは、何とか秘密裏に我々の部屋に来て、民泊先での出来事を報告してくれ、女子トークにも花を咲かせ、楽しんだ。出発前は、民泊先に泊まらないMを「わがままを通させるのか」とZ先生を責める発言をしていたD先生も、宿舎に戻ってきたMに声を掛け、スマホの写真を見せてもらいながら話が聞けたそうで、「Mを連れて来てホントよかった！」と言ってくれた。

自信をつけたMは、修学旅行後、受け入れられそうな友人を見出し、カムアウトしている。また、今まで校内では全く生理現象が起きず、入学以来行ったことのないトイレにも、他者の目を気にしなくて済む授業中にはあるが、教科担当に断って行けるようになった。他学年の教師からも、その報告がZ先生に入るようになり、職員全体でMの変化を喜び合っていることが私は嬉しい。



## 5 少しずつ広がる「震えるアンテナ」

### 時に管理的に硬まる私の「アンテナ」

K子のトラブルの時、入学直後でもあり、学年主任主導で動いたことが災いし、学年の生徒指導の中心になるべき立場のD先生と私の関係はずっとギクシャクしていた。

1年次3学期の学年会議でD先生から「弱音吐いてよい学年だって言うんだから、弱音吐きますよ。うちのクラス、朝読時に黙ってられないグループがいて、もう自分の手には負えないんです。助けてください」と声があがり、私がD先生の教室に行って直接生徒に話をする機会があった。

私自身、朝読の良くない面も頭の片隅に持っているながら、なぜ朝読をしたくないのかについて対話を試みることなく、「朝読の雰囲気はみんなでつくっていこう」という届かない内容で終わった。が、その日の午後、「生徒たちが学年主任に言いたいことがあるって言っている」とD先生に呼ばれ、再びD先生のクラスに行った。

そこで私を待っていたのは、朝読とは無関係な、学校で行っている「整容指導」への不満であった。1つは女子の整容指導を中心にやっている生徒指導部の女性教員K先生への不満、もう1つは、入学したての頃に起こった生徒間のトラブルで、私が「正しいことを言う場合でも、数の力があるんだから、複数で一人を囲んで伝えるというのはフェアじゃない」と注意したことを引き合いに出し、整容指導の時、力がある先生達が複数で生徒1人を囲んで指導するのは可愛そうじゃな

いかというものだった。

その時、私は「痛いところ」を突かれて、咄嗟に守りに入り、「それとこれは別でしょ。あれは、指導なんだから」と言ってしまった。

私が教室を出た後、D先生は、「自分に対しても何か言いたいことがあれば聞くよ」と、生徒に投げかけたそうで「整容指導の日は『まとめ髪』禁止と言われ、編み込みにしてきたら注意された。してきちゃいけない髪型は全部書き出してほしい」と言われ、確かにそうだと思って生徒に謝った、と学年会で報告した。その時の私は「してきてはいけない髪型を全て書き出すことなんてムリなのに、謝っちゃったら、『書いてないことはしていいこと』という誤ったメッセージになったんじゃないか」と、管理的反応をしてしまった。D先生は「自分は、間違っただと思うときには謝れる教師になりたいんで」と言い放った。その言葉が、私に刺さったまま、ずっと残った。生徒の身になって柔らかく動きたいと思いながら、一方では、ひどく管理的になってしまう、全く一貫性のない自分の姿を突きつけられたからである。

D先生が朝読の指導について弱音を吐いて声を掛けてくれたことは、学年の成果でもあるのだが、私がそれを受けて生徒たちに話したことは、「朝読」の「支配性」を相対化していない「フツーのお説教」でしかなかった。それでも生徒たちは、渡部先生なら話を聞いてくれるかもと再び私を呼び出し「整容指導」への不満をぶつけてきてくれた。これもまた、入学後から「聴く」ことを主眼にした学年づくりの成果であったはずであるが、私のアン

テナは肝心なその時、固く閉じて震えなかった。

管理的・支配的な学校において、一貫して生徒の身になって動くことは困難である。だからこそ、私たちは、震えるアンテナが本物かどうかを試そうとする生徒たちや、弱音を吐くことで私たちの管理的なふるまいを質してくる同僚教師たちから学び、震えるアンテナの「感度」をあげていく努力が常に必要なのだろう。

### 学び合える関係が互いのアンテナの感度を高めていく

2年の1学期、頭髪指導で最後まで髪を切ることと抵抗を示した5人の男子生徒に、D先生が「納得いかない者は、オレが1人ひとり潰します」と口走り、生徒の神経を逆なでしてしまう場面があった。このまま行くと翌日の考査を受けさせないという問題にまで発展する恐れもあると感じ、それはD先生の本意ではないことがわかっていたので、放課後生徒たちの不満を聴き取った。「あの一言はひどくないですか、先生からD先生に伝えてほしい」と言うので、伝えることを約束し、その場は収めた。

それまでは、指導の時間を考査開始前に設けるのが通例だったが「明日の指導、考査の前後どちらにしましょう」とD先生が尋ねてきたので「後にしようよ」と答えた。D先生も少しほっとしているようだった。このままではD先生の真意が間違っていて受け止められ、生徒との関係が壊れてしまうと思ったが、互いに試験監督が入っており、時間がなかったので、手紙を書いて手渡した。

私は頭髪指導が人権侵害だと思っていること、

教師が「正しいこと」とばかりに高圧的な力で言うことをきかそうとするのには違和感があること、私も矛盾の中で苦しんでいること、D先生の、建前と本音の狭間に立って揺れたり苦しんだりする姿を私はすごくいいと思っていること、今回の発言に生徒は傷ついていること、以前D先生が「謝れる教師になりたい」と言っていたから、これは伝えるべきかなと思って手紙を書いたことを伝えた。

D先生は、その後生徒に謝ったらしい。ただ、5人全員にではなく、最もこだわっていた一人だけを別室に呼んでの謝罪だったようだ。私も含め、なかなか一足飛びには変わらないと思い、5人に謝らなかった理由を尋ねることはあえてしなかった。これをきっかけに私とD先生の硬直していた関係も少しずつほどけていった。

体育科主催の体育祭に向け、生徒が準備した応援グッズの使用を、化粧禁止等のルールが守れない生徒がいたという理由で、体育科が禁止しようとしたことがあった。その時も、D先生が「生徒が自分たちで、何かわくわくすることを見つけて取り組んでいることを、何でも潰しちゃうのはどうかと思う」と言ったことをきっかけに、体育科と話し合う機会が持てた。

1年次から何度か実施してきた学年レクのトロフィーとして、A先生が家で、瓶を土台に、紙粘土でつくったマスコットキャラクターに着色し、コート剤を何層も塗った立派なカップを作ってきてくれた。皆、A先生にそんな才能があるとは知らずに、「すごい」と驚いた。A先生は、保護者が

怒り口調で電話を掛けてくると電話では説明できないと一方的に切ってしまったり、何かを説明するときも声が小さくなり、内容が伝わりにくかったりとコミュニケーションに課題のある人だった。副主任が、A先生の自作カップを見て、「Aさん、前の学年の時は周りから責められて萎縮していたけれど、今はすごくのびのび自分の色が出せているように見えてよかった」と言った。

「弱音を吐ける学年」と言いながら、一番弱音を吐いて支えてもらっているのは私で、自分の失敗に傷ついてオロオロし、首尾一貫しないダメな姿を晒す学年主任だが、学年教師集団の中に、生徒の声にも耳を傾けようとか、生徒と対話しながら行事をつくろうとか、そういう姿勢が育まれてきているように感じる。

「震えるアンテナ」が人と人をつなぐためには、学校から排除されそうな生徒や指導に関わる事件などを契機に、教師集団が生徒の声を聴き取り、見える形にして共有し、考え合う場や行為する場が必要である。また、生徒たちが応答し合いながらつくる自治活動も必要だ。

学校には、支配的で管理的な文脈が常に流れ込んでくる。そのことに自覚的にならなければと思いつつ、時々ブツブツ巻き込まれてしまう私がいる。

教師になって10年目くらいの時、ある同僚から「よく結婚や子どもの誕生で生徒の見方や接し方が変わっちゃう人いるけど、安っぽいと思わない？そんなことでは揺らがない信念が自分にはある」と言われたことがある。

経験によって人はどんどん変容していくものだし、矛盾を抱えながら依存し合って生きていくものなのに、その変容を自分に許せない（歓迎できない）のは苦しそうな生き方だと思った。

また、その人に「産休とるタイミングも人に迷惑掛けないよう配慮すべきだよ」と言われ、その呪縛に囚われた時期があった。

多忙化が進む学校現場で、生徒も教師も「人に迷惑を掛けてはいけない」「自律しなければいけない」という呪縛にかかり、互いにヘルプが出しにくくなっていることは問題だと思う。

自分は、独りでは立てない弱い存在であることを受け入れ、弱みを見せ合えるつながりは強いと感じている。冒頭に述べたように、私にとって「震えるアンテナ」で「汲む」ことは、幼い頃、母に自分の想いを届けられなかったことへの「代償行為」であったのだと思う。そうだとするならば、今まで自分にとってのマイナスでしかなかった母との葛藤が、実は、私の現在の教師としてのありようを形づくった、母からのギフトだったのかもしれない。

だからこそ、時々ブツブツ自分の見たくない姿を映しだしてくれる鏡である生徒や同僚や保護者とのつながりを大事にして、ともに活動をつくりだし、失敗し合い、学び合いながら、「震える弱いアンテナ」を広げ、誰のことも置き去りにしない学校をつくっていきたい。

(わたべ しょうこ)

汲む—Y・Y に— 茨木のり子

大人になるというのは  
すれっからしになるということだと  
思い込んでいた少女の頃  
立居振舞の美しい  
発音の正確な  
素敵な女の人と会いました  
そのひとは私の背のびを見すかしたように  
なにげない話に言いました  
初々しさが大切な  
人に対しても世の中に対しても  
人を人とも思わなくなったとき  
墮落が始まるのね 墮ちてゆくのを  
隠そうとしても  
隠せなくなった人を何人も見ました  
私はどきんとし  
そして深く悟りました

大人になってもどぎまぎしたっていいんだな  
ぎこちない挨拶 醜く赤くなる  
失語症 なめらかでないしぐさ  
子どもの悪態にさえ傷ついてしまう  
頼りない生牡蠣のような感受性  
それらを鍛える必要は少しもなかったのだな  
年老いても咲きたての薔薇 柔らかく  
外にむかってひらかれるのこそ難しい  
あらゆる仕事  
すべてのいい仕事の核には  
震える弱いアンテナが隠されている きっと……  
わたくしもかつてのあの人と同じぐらいの年になりました  
たちかえり  
今もときどきその意味を  
ひっそり汲むことがあるのです